Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法――

日蓮宗安立寺副住職
木田法恩さん

第77回

すべてが「ありがたい」と気づき言葉、行動にすることが大切です

きだ・ほうおん　1984年生まれ、神奈川県出身。立正大学仏教学部宗学科卒業後、日蓮宗の宗務院に6年半勤務。宗務院在職中に信行道場を修了し僧侶となる。2013年には布教研修所で6か月間の修行を積み布教専修師に、2015年には声明（しょうみょう）師に任命される。現在は日蓮宗の教育機関である信行道場、僧道林の書記も務める。安立寺／神奈川県川崎市多摩区東生田1-27-1

祖父も父もお坊さん。私はそんな家庭に生まれ、祖父が始めた横浜の教会（布教所）で育ちました。小学4年生になるとき、父が安立寺の住職になるというご縁をいただき、家族全員で現在のお寺に引っ越し。それ以来、父はお寺のことで忙しくしていました。

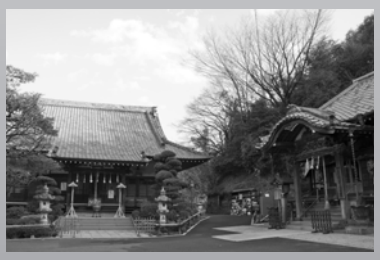
中学生になると、進学校に進んだのに勉強ができなかった私は自分の居場所を探してばかり。「お寺に生まれたのに全然幸せじゃない」という苦しみを抱えていました。思い悩んでいた15歳のとき、お坊さんと一緒にインドに行かせていただく機会を得ました。今よりずっとインドが貧しかったころ。物乞いをするほど貧しいのに、子どもたちの目はキラキラしていました。それを見て、自分の悩みなど大したことはない、悲観的に生きていてはダメだと教えられました。

たくさんのご縁をいただく中で寺の子に生まれたことにも感謝

まずは仏教をちゃんと勉強してみようと思い、立正大学仏教学部へ。でも、1年生の夏ごろにはもうやめたいと思っていました。そんなとき、一緒にインドへ行った僧侶の法話を聞きに行きました。末期がんで余命わずかなのに布教する姿を見て、「この方のご恩に報いるために大学を卒業しなくては」という思いに駆られました。

20歳のとき、再びインドに行く機会があり、そこで「知恩報恩」という言葉を教えていただきました。今までお寺で育ててもらった恩を理解し、それを還元する……それはまさに私がこれからしていかなくてはいけないことと考え、卒業後、日蓮宗宗務院に勤務し、在職中にお坊さんになりました。

節目節目にいろいろな方とのご縁をいただき、その中でようやく自分がお寺の娘に生まれたことに感謝できるように。すべてがありがたかったのだという思いによりやく行き着くことができました。



上／安立寺は460年ほどの歴史あるお寺。左が本堂、右が庚申堂。
右／20歳で2度目のインドに（写真左）。「知恩報恩」という言葉を知り、仏教に開眼。

「当たり前」から「ありがとう」の毎日へ

みなさん、「ありがとう」の反対語はご存じですか？ ありがたい＝有り難いですから、反対語は「当たり前」です。では自分が生まれてきたこと、朝起きて仕事に行くこと、すべてが当たり前でしょうか？ 私は6年前に父を亡くしましたが、朝になれば起きてくるのが当たり前だと思っていました。でも、ある朝様子を見にいくと亡くなっていた。そのように父を失って初めて、父がいかに大きな存在だったかに気がつきました。

明日が来るのが当然だと思っていたのに、東日本大震災ではその当たり前が失われた人がたくさんいます。当たり前のことなんて、この世にはひとつもありません。すべてが有り難い＝ありがたいと気づき、言葉や行動にすることが大切です。

撮影／広瀬壮太郎　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻